

『苔の衣』の兵部卿宮

—中世王朝物語において登場人物の子孫が帝位に即くこと—

* 岩佐理恵

はじめに

鎌倉時代に成立したとされる『苔の衣』は、『源氏物語』『狭衣物語』の影響を大きく受けており、数々の模倣が指摘されている。また、この物語は、直系の女三代の物語として、あるいは、男性主人公の視点から、苔衣大将、兵部卿宮という二人で前編と後編に分かれるという見方、苔衣大将という男性の一代記としての見方など、多面的な読み方を可能としている。^①

ところで、冬巻から中心に描かれる兵部卿宮の物語は、物語に春夏秋冬と一貫して登場し活躍する苔衣大将の物語に対する反復という観点から、安達敬子氏が、「もう一つの西院の姫君と右大将の恋の、ありえたかもしれぬ不幸なたち」として論じているように、苔衣大将が歩みえた、もう一つの、より不幸な人生を描いたものとしての位置づけをされている。

確かに、苔衣大将は、愛する妻を失った悲しみから、仏道の世界に入り、娘の危機には、仏の許しを得ながら救出に向かうというヒーロー性をもった人物である。対して、兵部卿宮は、苔衣大将の姫君（苔衣中宮）に密通して、その結果産まれた若宮と苔衣中宮への妄執のあまり死亡する。さらに、悪霊となって苔衣中宮にとりつき、苔衣大将に調伏されたという結末から、真の主人公とはいいがたい人物である。

しかし、兵部卿宮の壮絶な最期や、苔衣大将の再登場に注目するあまり、兵部卿宮の密通による子供が、春宮に定められたまま物語が閉じている、ということを見逃してきたのではなからうか。本稿ではその結末に注目し、『苔の衣』が、苔衣大将の一生を描く枠組を持ちながら、冬巻において、兵部卿宮を描く意味について考察したい。

〔本文引用は、今井源衛『中世王朝物語全集7 苔の衣』（笠間書院、平成八年）に拠る。引用した文の後に、ページ番号を記した。〕

一、皇位を継ぐ不義の子

これまで、兵部卿宮の、苔衣大将の「もう一つの西院の姫君と右大将の恋の、ありえたかもしれない不幸なたち」として、苔衣大将に比べ、登場人物としての劣った面ばかりが指摘されてきたが、兵部卿宮の、苔衣大将に対して優越した点を指摘することもできるのではないか。

このように考えると、恋の物語を反復することによって、苔衣大将の代わりに兵部卿宮が成し遂げたことは、「息子を帝にする」ということである。

物語において、女主人公は、妃となり、息子を帝とする可能性をどこまでも秘めている。しかし、男主人公は、帝の息子、しかも春宮でなければ、密通をしない限り、自らが帝位に即き、息子を帝位に即かせることはかなわない。しかも、苔衣大将の場合、愛した女性は、内大臣の娘であり、帝の父親となることは完全に不可能であった。それを成し遂げたのが、兵部卿宮の物語なのである。

密通によって、男主人公の子が、凶らずも帝となってしまう、という文脈は、さかのぼると、『源氏物語』において見られる。藤壺と光源氏の間生まれた冷泉帝である。冷泉帝の存在は、『源氏物語』の中でどのように機能するか。

そもそも、『源氏物語』における冷泉帝の存在とは、一つには、王権の侵犯によって源氏の超人性を象徴するものであり、さらには、物語内で冷泉帝が、本当の父親の存在を知ることによって、準太上天皇に光源氏が上り詰める、という光源氏という主人公の現実の地位に貢献するものである。^②

『苔の衣』との関係が指摘される、『狭衣物語』においても、狭衣大将は、結婚を勧められていた女二の宮と関係を持ち、その結果、女二の宮ではなく、母皇太后が、帝の子を妊娠したと偽装されることによって、息子が皇子となり、その後、春宮になり

〔キーワード〕苔の衣／子孫／兵部卿宮／結末／帝位

*平成十八年度生 国際日本学専攻

そうなる筋運びとなる。しかし、天照大御神の託宣によって阻止される。

大將は、顔かたち、身の才よりはじめ、この世には過ぎて、ただ人にてある、かたじけなき宿世・ありさまなめるを、おほやけの知りたまはであれば、世は悪しきなり。若宮は、その御次々にて、行く末をこそ。親をただ人にて、帝に居たま

はんことはあるまじきことなり。さては、おほやけの御ために、いと悪しかりなり。やがて、一度に位を譲りたまひては、御命も長くなりたまひなん。このよしを、夢の中にも、たびたび知らせたてまつれど、御心得たまはぬにや（巻四343）

この託宣で、狭衣大將の素晴らしさが語られるとともに、若宮を帝位に就けるのならば、先に、狭衣大將を帝位に即けなさい、と告げられ、狭衣大將は帝となる。よつて、若宮が帝位を継ぐことは血脈の乱れではなくなる。この場合もまた、若宮の存在は、狭衣大將自身の地位の向上につながっている。

『源氏物語』に話を戻そう。よく知られているように、冷泉帝の在位中には、子供が産まれないことが、『源氏物語』には語られている。

六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御朝おはしまさぬを飽かず御心の中に思す。同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしく思せど、人にのたまひあはせぬことなればいぶせくなむ。（若菜下165〜166）

この場面の時点で、源氏の娘、明石姫君腹の子が春宮に定まっております、源氏の血が皇室に受け継がれることはほぼ決定している。しかし、源氏は、息子冷泉帝の皇統が続かないことを嘆いている。これは、藤壺の血統が続かないことを嘆いている（4）とともに、自分の男系の血脈が皇室に受け継がれないことを嘆いているのではなからうか。

さらに、讓位後、源氏の死後になって、冷泉帝の子供が生まれる。そこでも、その子供が、皇統を継ぐことはないことが強調される。

帝は、まして限りなくめづらしと、この今宮をば思ひきこえたまへり。おりゐたまはぬ世ならましければ、いかにかひあらまし、今は何ごともはえなき世を、いと口惜しとなん思しける。（竹河104〜105）

『源氏物語』内において、源氏の皇統がそのまま受け継がれることはない、ということは、確定事項であり、皇統問題は終結している。源氏の血は、藤原氏と同じように、外戚としてしか皇室に受け継がれなかったのである。『源氏物語』作者は、乱れた皇統がそのまま続いてしまうことをよしとしなかった。

密通は、密通した本人の超人性を物語り、それによる現実的な栄華もまた、物語内

で本人に返ってくるものである。また、実在する皇室への配慮からか、皇統の血の乱れは致命的な乱れには至らない。乱れた場合にも、きちんと物語内で、その血の乱れは正されたり、辻褄の合う形にされたりしている。つまり、主人公に利益をもたらすためだけに機能するものともいえる。

『苔の衣』ではどうであろうか。物語の結末において、不義の子は春宮の地位を保ち、帝となる予定を覆さないまま、その皇統が正される予兆すら描かれない。この不義の子は、兵部卿宮自身にはどのような利益をもたらしたのか。

自分の子が帝になる前に死亡してしまった兵部卿宮は、むしろ子の存在に苦悩することによって、身を滅ぼしてしまつたといえる。その最期は、光源氏の妻女三宮に密通した柏木を彷彿とさせるが、この密通は、『源氏物語』のように、妻を犯された主人公光源氏の苦悩を描く装置ともなりえなければ、さらなる続編で、不義の子の苦悩が描かれたわけでもない。

神野藤昭氏は、この兵部卿宮の密通を、狭衣と女二の宮の密通に重なるものとし、「先行の物語を模倣して作品の形象化を図っているというより、読者により積極的に先行の物語との読みの同化と差異をふたつながらもとめている物語であるという評価を与えることが適切なのではないか」と述べ、兵部卿宮の死が、「彼と東宮妃との間の秘密の皇子を東宮にすることを可能にしたもの」であり、

兵部卿宮はあくまで「種まきし人」（冬二十六頁↓執筆者注、中世王朝物語全集では228頁）であつて、「雲井まで生ひのぼるべき」栄華は、女の側が担う物語になっているというのである。

と述べた上で、この物語を「その娘の代の悲劇とそれにもかかわらず、その子孫は栄華の位置を獲得してしまう物語」として位置づけている。

確かに、苔衣中宮の産んだ子供が、密通されて妊娠したという事情がありながらもなお、春宮となったということは苔衣中宮側の栄華である。しかし、その栄華は春宮妃となった時点で、すでに密通される前より保証されていた。春宮との間にできた子供ではなく、密通によって兵部卿宮との間にできた子が、春宮に定まることの説明にはなっていない。それでは、兵部卿宮と中宮の子が春宮に定まり、これから帝となることを予感させて終わる結末にはどのような効果があるのか。

二、兵部卿宮の血が受け継がれる意味

さて、兵部卿宮とはどのような人物であるか。兵部卿宮は、三条帝と苔衣大将の姉、藤壺との間に、二の宮として誕生することにより、夏巻に登場した。

男主人公として描かれるのは、苔衣大将が出奔した物語世界を描く、冬の巻からである。第二世代と第三世代に当たる、苔衣大将と兵部卿宮は、叔父と甥の関係である。にもかかわらず、二人の間には実の親子ほどにその類似性が見られる。

御叔父の中納言殿にいとよくおぼえ給へる。(83)

容姿^⑥だけではなく、行動、出来事においても類似が見られることについて、既に指摘がある。このように、兵部卿宮は苔衣大将の分身ともいえるべき存在であり、男君の系譜に並ぶ人物である。なぜ、親子ほどに、類似性が強調されなくてはならないのか。山田利博氏は、

俗に第三世代と呼ばれる兵部卿宮と苔衣の姫君の恋も、実はその前の右大将と西院の姫君とのその繰り返しの繰り返しなのであり、ただ一つだけ異なる点は、今度は死ぬのが女君ではなく男の方だということなのである。それ故、苔衣の入道は、いわば自分の妄執の化身である兵部卿宮の霊を祓わなければならないのであって、それを成し遂げたところで彼は完璧な悟りを開いたことになり、物語は完結するのであろう。

と述べている。確かに、苔衣大将を中心に見た場合、兵部卿宮との関係はそのように読めるであろう。しかし、ここでは若宮の父親ということに重点をおいて、兵部卿宮が苔衣大将の素質を受け継いでいるということについて考えてみたい。

ちなみに、苔衣中宮にとつて、兄春宮と兵部卿宮はそれぞれどのような存在であったか。

兵部卿宮に言い寄られた後、中宮の、次のような心中が描かれる。

月日に添へても疎くのみもてなしきこえ給ふに、あやにくなる御心遣ひのまさるに、姫君もいと苦しうわびしう思されて、さしも思ひ給はざりし春宮の御事もいそがはしくな思ひ給ふ。「いづれも同じ御事なれど、さるべきさまに宮・上も思し掟て給へるに、かやうのことも漏り聞こえては、いかに思はずに心得ず思されん」(212)

苔衣中宮は、夫の兄春宮に対して格別の愛情を抱いているわけでもなく、また、兵部卿宮も兄春宮も、異性としてあまり違いはないとしている。春宮妃という栄華に充

足しているわけではなく、親代わりの藤壺と三条帝の意向に従っているだけなのである。

しかし、物語内では、両者は鮮明に区別されている。兵部卿宮と、兄春宮の違いは、先ほども述べた、苔衣大将の素質を受け継いでいるかどうか、という点である。

神野藤氏は、「ひかる」という言葉が、苔衣大将、石山の姫君、苔衣中宮、兵部卿宮に使用されていることを指摘した。兵部卿宮誕生の際に、次のような描写が見られる。

また男皇子にてさし出で給へる御光を誰も誰もいかでかおろかに思さん。(82)

内裏には「とく入らせ給へ」とのみ申させ給へば、十月にぞ中宮参らせ給ふ。いまひとしほの御光を殿・上も思ふさまに見奉り給ふ。(83～84)

この場面は、母藤壺が時めく様子にも読めるが、兄春宮誕生の際には、使用されなかった「光」という語が、兵部卿宮誕生の際には使用されている。兵部卿宮に対して、「光」という言葉が用いられたのは、誕生の時のみであるが、確かに苔衣大将の素質を受け継がれている。辛島正雄氏がすでに指摘しているように、元服の際には、

御上げ優りはこよなく愛敬つき、見まほしき御有様譬へんかたなし。春宮はあまりなまめかしうるはしき御有様なるに、これは様変はりて、御心よりはじめた^⑩だずずるに見まほしき気色ぞし給へる。(207～208)

とあるように、人々の視線を捕らえて離さない様子も、元服時の苔衣大将と共通している。

御顔はふくらかに愛敬づきたるものからあてになまめかしく、見奉る人もずずろ

に見まほしき心地するに、(35)

ちなみに、苔衣中宮についても、母石山の姫君との相似が幾度も強調される。

ただ故母上の御顔を写しとりたるやうにおはすれば、御門も中宮もいみじき光と思しつづ、心殊にもてなしかしづき給ふ。(208)

父苔衣大将ではなく、母石山の姫君との同一性ばかりが強調されているのである。

辛島氏は、この兵部卿宮と、苔衣中宮について、苔衣大将と石山の姫君の「苔の衣の御仲らひ」に対する、「いまひとつの「苔の衣の御仲らひ」の物語」が展開しているとする。

この反復によって、兵部卿宮は、苔衣大将から続く素質を受け継ぎ、さらに、密通によって苔衣中宮との間に子をなすことによって、皇統につないだのだといえる。

そもそも第二世代の苔衣大将は、皇統というものを潜在的に意識した物語を辿って

いる。妻となつた石山の姫君は、もともとは帝の妃になる予定を覆して契つた相手であり、結婚後、三条帝から院の姫君の降嫁の話を引き受けることによって、妻を失うことになる。昔衣大将は、王権というものをある一面では超越し、結局は翻弄されて宮中を去ることになった。

臣下という立場で、内大臣の娘を娶つた昔衣大将の物語では、大将自身は帝にはなれないし、息子を帝にすることはできない。そこで「光」を受け継ぐ存在として、兵部卿宮が次世代の男主人公として登場したと考えられる。

そもそも、昔衣大将の父関白が、石山の姫君との結婚をとりつけた時、昔衣大将に對して、

御門へ参らせ給はぬとても劣りやはすべき。我が身の今日明日ただ人になりたるといふばかりこそ(93)

と言ひ、父関白は、皇統に近い血筋の源氏であり、結婚相手として、帝と昔衣大将では、血筋の上でも全くひけをとらないのだということを主張しているように、昔衣大将と王権の接近を、物語自体が表出している。

そういった潜在性を秘めていた昔衣大将と、妃になるべき「光」を備えた石山姫君という男女の組み合わせを、皇統に残すべく再現したのが、昔衣中宮と、兵部卿宮であり、仲睦まじい夫婦として君臨することは叶わなかったが、将来の帝となるべき男子は残したのである。

この春宮の存在をどのように考えるべきであろうか。宮崎裕子氏は、

結局、兵部卿宮は若宮に真実を伝えるすべもなく死去し、生まれながらに罪を背負わされた若宮を東宮に据えた『昔の衣』の物語は、次世代に波乱の火種を内包しつつ、大団円無き終幕を迎える。

と述べているが、物語は、未来を否定的に描いているのであろうか。

『源氏物語』でも、冷泉帝が、父である光源氏を、自分の臣下としてしているために、天変地異が起こるとして、僧都によって秘密は漏らされる。

「天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこのけなり。いとぎなくもの心知ろしめすまじかりつるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまして、何ごともわきまへさせたまふべき時にいたりて咎をも示すなり。よろづのこと、親の御世よりはじまるにこそはべるなれ。」(薄雲452)

『狭衣物語』についても引用したように、帝が父親の存在を知らないまま、臣下として扱うことに対して、天変地異が起こるとしている。天変地異を起こすのは神々で

あろう。

この物語においては、夢告が何回も登場している。石山の姫君が生まれる時も、兵部卿宮に、住吉の姫君との子の存在を知らせる時も登場した。昔衣大将が昔衣中宮の危機を知らされた時も、お告げがあった。豊島秀範氏が指摘しているように、本物語においてなされる神仏による予告は、重要な出来事に関するものといえる。この三代にわたる物語は、神仏こそが、常に見守り、把握しているともいえる。

兵部卿宮が、昔衣中宮に密通した晩に見た夢の中で、二人の間に子が産まれることは、告げられていた。

さばかり心騒ぎなる中にもつゆまどろみ給へるにや、御夢に、めでたくうるはしく装束きたる童の「これなん奉るべき物」とて、この世の物とも見えず光り輝く玉を桂の枝に付けて奉るを、「いとめでたし」と思ひて持ち給へるに、この女御の君側よりあへなく取りおはしぬるを、「いとあさましきことかな。東宮の御物にこそはならんずらん。何しに取られ奉りぬらん」と、いとねたしと思ひて見果て給ひてうちおどろき給へるに、(219)

本人達にしてみれば、妊娠したかどうか知るよしもない段階から、若宮の誕生は、神仏によってすでに決められ、あたかも、望まれていた出来事であったかのように、これからの処遇が示唆されている。夢の中で、若宮は「光り輝く玉」と描写され、第二世代から受け継がれてきた「光」は若宮に受け継がれていることが明らかとなる。

加藤奈保子氏が、狭衣物語との類似を指摘した上で、

狭衣と女二の宮、飛鳥井女君の関係を撰取することで、第三世代と第四世代をつないでいることになる。つまり、男女の関係や第二世代・第三世代の親子の枠組みを、『狭衣物語』の撰取で補強しながら、第三世代と第四世代の親子の骨格を与え、物語では描かれることのない第四世代の存在を、物語の中核をなす三世代の親子の枠組みに組み込んでいるのである。

と述べているように、描かれない第四世代とのつながりが、物語内において、示唆されている。

おそらく、第四世代は、昔衣大将の子孫達とともに、住吉姫君と兵部卿宮の息子が、母藤壺に育てられることによって、臣下としての施政者に上り詰め、兵部卿宮と中宮との間に産まれた「光」を受け継いだ帝とともに、施政を行う世の中になると考えられる。

兵部卿宮の物語は、自身の人生を悲劇として犠牲にしながらも、三代にわたつてき

た物語のその後の物語世界の頂点に、苔衣大将の「光」を受け継ぐ物語なのである。

三、苔衣大将の救出

前章のように、夢告を神仏が望んだ結果だと考えた場合、苔衣大将の中宮救出は、単なる親子としての情から出た行動としてだけでは見られなくなる。苔衣大将は、出家して都から離れていたが、神仏のような存在によって、中宮の危機を知らされ、助けるよう告げられる。

夢ともなくいと尊げなる僧傍らに立ちて、「この人汝ならでは助くべき人なし。親子の契りはなほ深きものなり。この度の命生け給へ」とのたまふを、いと心得ず思すほどに、(273)

このお告げによって、苔衣大将は中宮を助けに行く。この様子から、豊島氏は、本作品を、次のように述べている。

いわば無常な世の中であって、なおかつ断ち難いものとして、親子の絆があるのだという主張、それは仏も許すものとして、三位中将を通して描くことに『苔の衣』の主題は求められなければならない。

確かに苔衣大将の視点では、娘を思う気持ちから出た、自発的な行為と考えられる。物語全体を通しての最大の主人公の再登場によって、親子の恩愛の物語をしめやかに閉じるにもふさわしい出来事でもある。

しかし、あえてここで、苔衣中宮の迎えている危機を中心に考え、もしも苔衣大将が救出しなかった場合、どうなるのかを考えたい。その場合考えられるのは、兵部卿宮の霊が、苔衣中宮との関係や、若宮の本当の父親について告白したり、苔衣中宮が死亡したりすることによって、若宮の帝への即位が危うくなる事態であろう。

つまり、苔衣大将の救出によって、若宮の乱れた皇統はそのまま続行されることがとらえず保証され、肯定された形となっているのである。

さらに、苔衣大将は、苔衣中宮の瀕死の状態を救ったが、密通され、不義の子を産んだという事情を知らない。兵部卿宮の悪霊の告白によって、苔衣中宮への思いを知った兵部卿宮の母藤壺も、若宮の本当の父親が誰であるかを知るには至らなかつた。

苔衣中宮の瀕死の事態は、苔衣大将のその後の姿を描き、親子の恩愛を描くために必要となった出来事とも考えられるが、結局、苔衣大将は、苔衣中宮の全ての苦悩を

理解して救出したわけではなく、表面的な応急処置を施したに過ぎない。全てを知った上で夢告をしてくる神々の真意を知らぬまま、使役のような役割を果たしただけとも言えるのである。

本物語の展開には夢告やお告げをしてくる見えない神の存在がある。それらは、この苔衣大将へのお告げに至るまで、三代にわたって、苔衣大将と石山姫君の「光」を受け継ぐ子供が帝位に即くように、導く存在のようにも見えてくるのである。

宮崎氏の述べている通り、若宮の御代になって天変地異が起きるかもしれない。もしかしたら、『源氏物語』の冷泉帝のように、成人してから、事情を知る者によって、真実を告げられるのかもしれないが、物語内において、秘密を露見する機会は、神仏の手によって阻まれたのである。神々が物語世界の将来を幸福に導くのか、その逆なのかは分からないが、「光」が受け継がれるよう仕向けられているのである。

四、中世王朝物語の子孫達

平安期の物語の男主人公の皇妃への密通が、主人公そのものの、超人性を提示し、さらに息子を帝にすることによって、権威を強めるものであったのに対し、『苔の衣』における兵部卿宮の皇妃への密通は、親の世代の幸福を犠牲にして、親の「光」を受け継ぐ不義の子が、物語のその後の帝として即位し、施政を担う予兆をみせることに、意義を見出せるものであった。

ここで、中世王朝物語全体を見渡してみると、院政期に成立した『有明の別れ』において、女右大将は、男装によって、跡継ぎを産む妊娠中の女性を獲得したのち、中宮となって帝と東宮の母となる。この男装もまた、跡継ぎ獲得のため女右大将の手段であると同時に、臣下である男主人公（女右大将）が、息子を帝にするという物語を描くための手段の一つであるとも考えられる。

さらに、女右大将の素質を受け継ぐ二の宮が、同腹の兄弟の子孫を待たずに、春宮となつている時点で物語が終結している。これは女右大将の「家」の繁栄という問題を超えて、女右大将の「素質」を受け継いだ方の子孫に、施政者として、未来を託している点で共通している。

『石清水物語』では、武士である伊予守が密通した後、木幡の姫君が産んだ一宮は、父親が誰であるかについて、特に言及されていない。すでに井真弓氏が指摘しているような、密通による不義の子の可能性があったとしても、武士の血が皇統に混ざるとい

うことをあからさまに書くことは不可能であったと考えられる。¹⁵⁾

しかし、神々に守られた武神のような伊予守と、木幡の姫君の不義の子が、帝となつて世を治める、という可能性を、暗黙のうちに内包したまま閉じているものとして読むべきであろう。

本稿では、『苔の衣』の、皇位を継ぐ不義の子の存在に注目し、その父である兵部卿宮の物語を「光」を帝位に結びつけるものとして捉え直した。ここで、未来を担う存在として子供に焦点を当ててみると、男性が出家遁世し、女性が榮華を極めるいわゆる「しのびね」型では、残された子供達は臣下である男の家におさまりながらも、未来の施政者として期待される位置にいらることがいえる。¹⁶⁾

桑原博史氏は、『とりかへばや』後の、女君を帝に召された男主人公の生き方を描く物語として、『海女の刈藻』『しのびね』『むぐら』『石清水』の男君の出家について、

そこでは出家後の主人公の幸福な境遇として、極楽往生という主人公自身のものほかに、子孫の繁栄という方向が強く保証されている。¹⁷⁾

と述べている。さらに、中島泰貴氏は、男君方の地位を揺るぎないものにする子供をもたらず女君の属性について言及し、「しのびね」型を、「女（妻）を帝に一方的に奪われてしまった男（夫）」に、その女を介して結果的に幸いもたらされ、帝との絆が深まる話」とし、妻を帝に差し出し、出世する男君を描いた「なよ竹物語」の男君を、読者の共感を得るために出家遁世させ、「女を共有する臣下と帝とによる君臣合の理想」の王朝を再現しようとしたものとする。¹⁸⁾

男君の家に引き取られた子供が、施政者の座に納まることは、男君の子孫、つまり家の繁栄ともいえる。しかし、それだけにとどまらず、誰が施政者になるかという問題は、物語世界全体の今後につながるのではなからうか。

『しのびね』では、帝に女君が奪われる前に生まれた子供は、父親方の実家に引き取られ、臣下として権力を振るう施政者となること、女君と帝の子供が帝となることが約束されている。これらはそれぞれの家の繁栄に関わることでありながら、物語世界の今後を示唆している。

つまり、密通や、帝の妻となる女性との悲恋は、理想の貴公子と姫君の悲恋によってできた子供達を、それぞれ施政者の中心に配することによって、理想の政治を未来に託すための方策としての機能も果たしている。

『海人の刈藻』は、密通によって、中宮との間に子をなした権大納言の即身成仏を描いている。「帝の妻をあやまつ」型であるが、中宮がそのまま宮廷での榮華を極め、

不義の子の新中納言が出家した父方に育てられる点は共通している。密通後、女御の懐妊が発覚した後、初瀬で権大納言は夢を見る。

明日出で給はんとて、うつくしき御僧の、うしろの障子押し開けて、「かなふまじきことを思し嘆くがいとほしければ、後の世は助け聞えん。そのほどの慰めに、これをだに奉る」とて押し出で給ふものを見れば、うつくしき女の、黄金の

枝に『史記』といふ書を一卷付けて持給へるを、受け取り給ひて見れば、心尽くし聞こゆる人なりけり。いとあさましう嬉しきに、大将おはして、「いみじきものさまかな」とのたまへば、「それに置かせ給へ」とて、差し奉り給ふと御覧じて、夢さめぬ。(126く127)

その後、即身成仏した権大納言は、成長し、自らの出生に嘆く新中納言の夢の中に現れ、次のように言う。

いたくな嘆き給ひそ。昔の契りなれば、かかる心苦しきことしばし侍りき。されば君を残し置き、世の固めともなし、また後の世の光ともなり給ふべきゆゑなり。

長谷の観音の計らひ給ふことなり。中宮にこそよく宮仕へ給ふべけれ。我はいと涼しき道に侍り。くは、見給へ。(203)

新中納言を、「世の固め」とし、自分の後世の闇の光明とする。それは、どちらも「長谷の観音」が取りはからつたことなのである。

このように、子の将来に焦点を当ててみると、男君女君の悲恋が、物語のその後のための物語とも捉え直すことも可能となる。「しのびね」型の物語について、男君の出家遁世に対して、榮華を得る女君、という結末が強調されてきたが、その悲恋によつて生まれた子供に将来が託されている、という点を見直すべきである。

女性達の榮華は、多くは表面的なものにとどまり、内面においては愛する男君を失うという苦痛を伴う場合が多い。女君の榮華は、「家」の繁栄にも大きく貢献すると同時に、次世代の世の中全体のための犠牲ともとれる榮華なのである。皇統には女君の血筋（素質）、臣下には男君と女君の血筋（素質）が継承されることによつて、次世代の施政の中心を登場人物の子孫達が担うことが保証されるのである。

中世王朝物語においては、王権の権力の低下が指摘されるが、作者達貴族がおかれている激動の時代においても、宮中における絶対的な権力を持つことが世界を変える近道となる。物語の主人公達は、結局、皇統という権威に足を踏み入れることを拒めないのである。

その中でも『苔の衣』は、その背後に、神の姿が感じられ、未来に理想の施政者に

治められる世界を創造しようとしている可能性を述べた。それは中世王朝物語の、物語のその後、つまり未来に、人間の盛者必衰を見てきた作者には書き得ないような、未曾有の聖代の到来を物語世界に約束する、方法の一つなのである。

注

- (1) 『中世王朝物語・御伽草子事典』（勉誠出版、平成十四年）によると、三代三部の主題の集合という見方として、森岡常夫「『吾の衣』にあらはれたる愛情」(文化) 昭和九年十月、佐々木八郎「『中世文学の構想』(明治書院、昭和五六年)、右大将夫妻の物語と兵部卿宮の物語で前編と後編に分けるという見方として、『増補改訂日本文学大辞典』(新潮社、昭和二五年)の「『吾の衣』の項(大野木克豊氏担当)、『日本古典文学大辞典』(岩波書店、昭和五九年)『吾の衣』の項(小木喬担当)、それに対し神野藤昭夫氏(『『吾の衣』の方法と特質』散逸した物語世界と物語史』若草書房、平成十年)は女系三代の物語が、悲劇のうちに、栄華を獲得してしまう物語として、豊島秀範氏(第四章 物語の変奏―中世物語論―)第一節「衣」の系譜―狭衣・小夜衣・吾の衣―第三節「吾の衣」主題論『物語史研究』、おうふう、平成六年)は親と子の別れによる悲哀の物語として、統一的把握で理解しようとしている。足立蘭子氏(『『吾の衣』論―母系物語としての意味―』(『年刊日本の文学』3、有精堂、平成六年)、『中央王朝物語・御伽草子事典』(山田利博氏担当)も、統一的把握である。
- (2) 「源氏物語という拘束―『吾の衣』・『木幡の時雨』の場合―」(『源氏世界の文学』清文堂出版、平成十七年)
- (3) 日向一雅氏は、予言された光源氏の帝王の相は、「現実的には不義の皇子冷泉帝の即位によって天皇の父になるという形で実現する」とし、「源氏は『神の妻』である藤壺との「聖婚」によって王たる資格を獲得し、神の子として生まれ変わってくるということであったのではなからうか」と述べた。(第四章光源氏の王権と「家」『源氏物語の準拠と話型』至文堂、平成十一年一月)
- (4) 藤本勝義氏「冷泉帝退位と光源氏―若菜下巻の構造をめぐって―」(『日本文学』昭和五十五年一月)
- (5) 前掲(1) 神野藤氏論文
- (6) 前掲(2) 安達氏論文、辛島正雄氏「『吾の衣の御仲らひ』再考―『吾の衣』読解のための覚書―」(『中世王朝物語の新研究 物語の変容を考える』新典社、平成十九年)、足立蘭子氏「転倒した『狭衣物語』―鎌倉物語『吾の衣』と『始原』なるものへの指向(吉井美弥子編『みやび』異説―『源氏物語』という文化』平成九年、森話社)、加藤奈保子氏「『吾の衣』の人物形成―『狭

衣物語』撰取の方法―『大妻国文』平成十一年三月)

- (7) 前掲(1) 山田氏論文
- (8) 前掲(1) 神野藤氏論文
- (9) 前掲(6) 辛島氏論文
- (10) 前掲(6) 辛島氏論文
- (11) 「不義の子の罪―『吾の衣』冬巻「いと罪深きことにてあんなるものを」考―」(『文献探究』平成二十年三月)

宮崎氏は、兵部卿宮が病臥中に言った、「さすがに浅からぬ契りにはありながら、春宮の若宮などをばよその人に見なしきこえて、折節につけては恋しく思ひきこゆれど見奉ることなく、せめては今しばしに長らへて、そら恐しきことなれどあの御心一つにだに言ひ知らせ奉らん。いと罪深きことにてあんなるものを」(26)の箇所を、女御に自身の心情を訴えたいと言っているのではなく、若宮にだけでも自分が父親だと真実を知らせないと、若宮にとって罪深いことになる、ということと言っているとしている。

- (12) 前掲(1) 豊島氏論文「第三節『吾の衣』主題論」
- (13) 前掲(6) 加藤氏論文
- (14) 前掲(12) 豊島氏論文
- (15) 『石清水物語』の後日談に示される「不義の子」の可能性とその意義(『詞林』平成十六年四月)
- (16) 『あきぎり』『むぐら』では、男君と、妃となる女君の間に生まれるのは姫君であるが、いずれも入内している。さらに、帝と妃の間には春宮が生まれている。
- 『むぐら』では男君の死後の記述として、次のような部分がある。

「母女御のめでたさに、大将は亡せ給ひにしなりけり」、いづくにも、「大将殿の上のかかる辛ひ」と世の人言ひののしる、ことわりなり。(21)
- これは世間の評価をもとにした語り手の言であるが、女君の家系の栄華を重点的に描いている。しかし、物語の最終段階において、帝と女君の若宮が即位した時定められた春宮は、帝の弟の子であり、女御として興入れたのは、女君と男君の間に産まれた姫君である。帝と弟で、交互に春宮の地位を譲り合っているとはいえず、男君から女君を奪った帝の皇統は継承されない可能性を残している。
- (17) 「第四章作り物語における出家遁世譚の一考察」(『中世物語の基礎的研究 資料と史的考察』風間書房、昭和四十四年)
- (18) 「ししのびね型」試論(『名古屋大学国語国文学』平成十五年十二月)『中世王朝物語の引用と話型』ひつじ書房、平成二二年)

※『源氏物語』『狭衣物語』の本文は「新編日本文学全集」、『むぐら』『海人の刈藻』の本文は、「中世王朝物語全集」に拠った。

HYOUBUKYOU-NO-MIYA of “KOKE-NO-KOROMO”

—The significance of a descendant of the main characters ascending the throne in the court literature of the Medieval Period—

IWASA Rie

abstract

This paper points out the peculiarity of “KOKE-NO-KOROMO” that ends with the decision that the child, who was born as a result of an adulterous affair of the Crown Princess, succeeds the throne. The hero who committed the adultery was HYOUBUKYOU-NO-MIYA. He was a tragic hero who lived a life of agony and became an evil spirit after his death. He was also considered inferior to the main hero KOKEGOROMO-NO-TAISHO, who had become a priest. The paper shows the significance of HYOUBUKYOU-NO-MIYA’s son succeeding the throne.

Moreover, this paper examines a role of the descendant of the hero and heroine in the stories placed “SHINOBINEGATA” which describes how the hero becomes a priest and the heroine becomes an empress.

Keywords : KOKE-NO-KOROMO, the descendant, HYOUBUKYOU-NO-MIYA, the ending, the throne